

[最優秀賞]

佐貫 颯さんレビュー (秋田市)

書評対象作品

『四畳半神話大系』 森見 登美彦 著 (KADOKAWA/角川文庫)

これはおんぼろアパート、下鴨幽水荘の四畳半に起居する「私」のお話である。大学三回生の春、二年間の学生生活を経て彼は何も成し遂げていなかった。勉学や肉体的鍛錬に励むでもなく、傍らに黒髪の乙女がいるわけでもない。あるのは妙竹林な縁ばかり。

ただひたすら堂々と暮らすことだけに専念している樋口清太郎。類まれな鯨飲家で酔うと人の顔を舐めようとする羽貫さん。ラブドールを一途に愛する男前なサークル弁慶城ヶ崎氏。爪を隠さない能ある鷹のごときクールな黒髪の女性の明石さん。そして、人の不幸で飯が三杯食える妖怪のような小津。いささか個性的過ぎる人物が「私」の周囲を立ち回る。

章ごとに四つの平行世界が展開され、それらの世界で「私」はそれぞれ別のサークルに所属する。四人の「私」は異なる二年間を送っており、上記で羅列した各人の性質は一人を除いて、ある「私」が知る一面に過ぎない。そして一方の「私」は一貫して全ての世界で墮落の一途を辿っていた。どの世界でも「私」はあり得べき別の人生へと可及的速やかに軌道修正しようとし、偶然にも京都木屋町の路上で占いの老婆と出会う。老婆は『コロッセオが好機の印』という謎の助言を与え、「私」は疑問を抱きながらも代金を支払うが、やがて思わぬところでその好機が訪れる。

『今ここにある君以外、ほかの何者にもなれない自分を認めなくてはいけない』という言葉が作中にある。不満ある人生を送る人にとって、この言葉は今ある人生からの脱出はできないという一種の諦めの必要性を示唆しているようにも思えてしまう。しかし、悲観的になる必要はない。人生は御都合主義的でもあり、少しの思い切りさえあれば事々は都合よく、やや強引にでもめでたく幕が引かれるのである。あれほどかつての無益な学生生活を後悔していた「私」も、変わらない「私」のままで人生の好機に巡り合い、それを掴もうとする。その様を皆さんにはぜひ読んでいただきたい。